

妥当性  
 ・自己評価は妥当である……○  
 ・自己評価は妥当とはいえない……△

王寺南 義務教育 学校	中項目	評価指標	自己評価	教員アンケートの肯定的割合	改善策・次年度の目標等	学校関係者評価	
						妥当性	ご意見など
教育活動	よく分かる授業づくり	・児童生徒の学習意欲を高める指導に努めている	B	98%	保護者アンケートでは、学力向上に関する学校の取組に対して肯定的に回答した割合は83%（昨年度比1ポイント増）、落ちて学習できる雰囲気であると回答した割合は79%（昨年度と同じ）、児童生徒アンケートでは学力が向上したと回答した割合は88%（1ポイント増）。教員アンケートの肯定的な回答の割合に比べるとそれぞれ低いのは昨年度と同傾向。今後も引き続きよく分かる授業づくりに努め、児童生徒の学習意欲や学力の向上を目指すことが大切である。	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 7名…○	・学力の格差を感じる。後期課程の数学では習熟度別でのクラス分けなどが必要ではないか。 ・児童生徒の理解度に差があり、全ての児童生徒に理解させる授業を実施する難しさがあると思う。
		・児童生徒にわかりやすい授業を実施している	B	100%	今年度は、王寺町が導入しているRST（リーディングスキルテスト）を生かした汎用的読解力の向上について、県教委の研究協力校の指定を受け、授業研究に取り組んでいる。また、若手教員の指導力向上のための授業研究も定期的に実施し、互いに学び合ってきている。 今後は、さらに前期後期の課程を超えて教員が学び合えるような授業研究の充実に努めるほか、町が進める総合学力調査やデジタルドリルの活用を図り、個別最適な学びの在り方について研究を進める予定。	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 7名…○	
	学校生活の充実	・児童生徒が充実した学校生活を送っている	A	98%	児童生徒アンケートでは充実した学校生活を送っていると回答した割合は90%（昨年度比1ポイント増）。保護者アンケートでは、児童生徒が充実した学校生活を送っていると回答した割合は92%（2ポイント増）、様々な活動によく取り組んでいると回答した割合は91%（5ポイント増）。開校2年目を迎えて保護者にも取組の様子が伝わってきている成果でもあり、ほぼ目標を達成できたと考える。	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 7名…○	・個々には様々な課題があるが、全体として充実した学校生活を送ることができている。  ・分離型の良さが出ていると思う。 ・第4学年の負担を心配したが、それ以上に児童たちはやる気が見えなざっている様子が見て取れた。
		・ユニバーサルデザインを意識し、児童生徒が心地よく過ごせる学級・学年の雰囲気をつくるよう努めている	A	95%	太子学舎では第4学年児童のリーダーシップを高めることを目指した取組を、畠田学舎では児童生徒会を中心とした第5～9学年全体で行う取組を学校全体で進めており、それぞれの取組の中で、生き生きと活動する児童生徒の姿が多く見られる。畠田学舎の第5、6学年では後期課程と合わせた各学級単位の取組を進めることが、活気や一体感ある学級経営につながっている。 今後も、両学舎の児童生徒をつないだ取組の充実に努めるほか、特に畠田学舎では、後期課程の生徒指導体制を生かし、チームとして取り組む児童生徒理解や指導を一層進めたいと考える。	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 7名…○	

<p>人権が大切にされる雰囲気づくり</p>	<p>・人権教育の重要性を認識し、児童生徒一人一人を大切に教育を行っている</p>	<p>B</p>	<p>95%</p>	<p>児童生徒アンケートでは、いじめを許さず人とのつながりを大切にしていると回答した割合は95%（昨年度と同じ）であったものの、学校に安心して過ごせる雰囲気があると回答した割合は87%（1ポイント増）。1割程度の児童生徒が否定的に回答していることは昨年度と変わらず、大きな課題である。また保護者アンケートでは、学校が児童・生徒間の人間関係を大切に、いじめを許さない教育をしていると回答した割合は85%（1ポイント増）。今後も引き続き人権が守られ、大切にされる学校づくりを進める必要がある。 各学年、学級で課題となっていることや配慮の必要な児童生徒については、職員会議の際に報告し合う時間を設け、情報共有している。今後も、学舎ごとの課題や情報共有を定期的に行うなど、義務教育学校全体で児童生徒や教職員が共に人権感覚を磨き、高め合う気風の醸成に努めたい。</p>	<p>○ 学校関係者評価委員 7名のうち 6名…○ 1名…△</p>	<p>学校で配慮の必要な児童生徒に適切な対応ができてきているか話し合い、情報共有し、全体で高め合っていたきたい。</p>
<p>進路指導の充実</p>	<p>・児童生徒に将来の夢や生き方、進路について考える指導を行っている</p>	<p>B</p>	<p>97%</p>	<p>進路指導に関して、教員アンケートによる肯定的な割合と比べ、保護者アンケートでは同じ質問へ肯定的に回答した割合は64%（昨年度比5ポイント増）。取組への理解は進んできているものの、今後も進路に関する情報発信や懇談等の内容充実などに努める必要がある。 第9学年では、生徒や保護者との定期的な面談以外にも必要に応じて相談や面談を行うなど、指導の充実を努めている。また、進路指導部では情報を共有し学年全体での指導を徹底している。 来年度に向け、第8学年で職場体験活動を計画するほか、学校全体でキャリア教育を推進する必要があると考える。</p>	<p>○ 学校関係者評価委員 7名のうち 7名…○</p>	<p>・職場体験活動の計画に大いに期待する。</p>
<p>学校の組織運営</p>	<p>・職員が目標を共有し、協力して学校運営を行う体制づくりができていく。</p>	<p>B</p>	<p>89%</p>	<p>保護者アンケートでは、学校の環境美化や施設整備、学習環境整備に関して肯定的に回答した割合は87%（昨年度比12ポイント増）。ハード面で整備いただいていることへの理解が進んでいる。 学校運営委員会や主任者会を定期的に開催し、目標共有や取組の方向性等の確認を各部や学年のリーダー間で行うほか、今年度は学舎間連携のため、両学舎の教員が集まって協議する機会を設定。また、学校通信「王南通信」で両学舎の取組を毎週、全教職員に周知し、情報共有を図っている。 来年度は、両学舎の教員が集まる会議を計画的に開催し、成果と課題の共有を図り、義務教育学校としての学校運営の充実につなげる。</p>	<p>○ 学校関係者評価委員 7名のうち 7名…○</p>	<p>・王南通信は学校の取組や方針を共有できるものと考えている。保護者として通信を通して学校生活がよく分かるので、今後も続けていただきたいと思います。 ・学舎が二つに分かれているが、全教職員で情報共有を図っている。</p>

学校経営	学校教育の理解促進	・児童生徒や保護者、地域住民、教職員等が、学校が進める教育について理解を深めることができるよう情報発信に努めている	A	93%	保護者アンケートでは、学校の様子を分かりやすく伝えていると回答した割合は92%（昨年度比4ポイント増）であり、ほぼ目標は達成。 両学舎の取組を掲載した学校通信「王南通信」を毎週発行。学校の教育活動への理解促進につなげ、施設分離型の義務教育学校であるために9年間を通した営みの見えにくさを通信で補ってきた。 今後も引き続き情報発信の充実に努めたい。	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 7名…○	・王南通信は保護者もとても楽しみにしている。学校の様子が分かる大事な情報の一つとなっている。
	教職員の働き方改革	・校務支援システムを活用し、業務軽減を図っている	B	60%	校務支援システムとともにICT機器を活用し、一定の業務軽減が進んでいるものの、ハード面の整備に対してソフト面での効果的活用が追いついていない現状である。状況に応じて活用が進むよう校内での情報共有をさらに進めたい。 定時退勤に関しては、教員の回答が昨年度比で14ポイント低下。非常に大きな課題であり、部活動指導のため業務が長時間化している実態や、定時退勤日を設けても、業務が終わらず定時に退勤できない、もしくは仕事をもち帰る教員が複数名いる。超過勤務の解消の効果的方策がなかなか見出せない。 部活動の社会教育への移行をはじめ、今後、町教委とも連携して改善方策等を探っていく必要がある。	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 6名…○ 1名…△	・今後も改善方策を探り、定時退勤を目指してほしい。 ・教員が健全に仕事に従事できることを保護者が理解し、協力していくことが重要であると考えている。 ・教職員の人数を増やす手立てが必要。
		・業務に効率的に取り組み、定時退勤日を含め週1回以上は定時に退勤している	C	41%	部活動の社会教育への移行をはじめ、今後、町教委とも連携して改善方策等を探っていく必要がある。	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 5名…○ 2名…△	・教員が必ずしも取り組まなくてもよい業務の他者への分担が進まない原因を追究する必要がある。

義務教育学校の特色に関する評価表

王寺南 義務教育 学校	中項目	評価指標	自己評価	教員アンケートの肯定的割合	改善策・次年度の目標等	学校関係者評価	
						妥当性	ご意見など
英語教育の推進		・ALTを活用した英語教育に取り組んでいる	A	100%	89%（昨年度比1ポイント増）の児童生徒がアンケートで英語教育が大切だと回答。保護者アンケートで学校が英語教育の推進に取り組んでいると回答した割合は81%（3ポイント増）であり、学校が進める英語教育に対する受け止めは概ね良好であるといえる。 今後も児童生徒が積極的に取り組む授業づくりや英検受検の推進に努めたい。	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 6名…○ 1名…△	・英語教育は今後も重要となるため、英検受検に引き続き力を入れていくべき。 ・まだまだ課題が多いと考える。グローバルな社会で生きていくこれからの子供たちのために、さらに強化していただきたい。
		・英語教育への肯定的な回答が85%以上である	A	児童生徒 89%			
		・9年生で英検3級以上取得した生徒が50%以上である	C	該当生徒 33%			
	「和」プロジェクトの推進	・王寺町を知る・考える・関わる取組を系統的に行っている	B	69%	アンケートで王寺町について様々なことを知り考えることができたと回答した児童生徒は84%（昨年度比5ポイント減）。教員の肯定的回答も昨年度から7ポイントの減であり、課題が見られる。 副読本を活用した学習のほか、町たんけんや史跡探訪など地域を題材にした学習を実施しているものの、さらに王寺町について自分との関わりで考える学習を一層充実させる必要がある。	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 7名…○	・児童生徒たちは、今まで住んでいた王寺のまだ知らないことに驚きもあったようで、家でもいろいろと得意気に話をしてくれた。

子どもたちの活動

プログラミング教育	・ICTを活用した授業を実施している	A	98%	児童生徒アンケートでICTを活用した授業は分かりやすいと回答した割合は89%（昨年度比2ポイント減）、プログラミングの授業は楽しいと回答した割合は83%（8ポイント減）、保護者アンケートでICTを活用した分かりやすい授業が行われていると回答した割合は77%（3ポイント増）。ICT活用については概ね目標を達成しているが、プログラミング教育に関しては、教員の肯定的回答も19ポイント減と大きく低下しており課題が見られる。プログラミング教育については、ICT機器を使った学習だけでなく、各教科等の中で系統的、効果的に推進を図る必要がある。	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 7名…○	ICT活用が今後さらに進めば、教育内容がより充実したものとなると考える。
	・プログラミング教育を系統的に進めることができる	B	51%			
AIを活用した個別最適化学習	・ラインズドリルやスタディ・ログのAIによる分析を活用して、一人一人に適した学習を実施している	B	72%	教員の肯定的回答が昨年度から22ポイント増加しており、取組が一定進んでできている。来年度は、王寺町が進める総合学力調査と連携したデジタルドリルを活用し、取組の効果的な推進に努めたい。	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 7名…○	・教員の経験の積み重ねが効果を引き出すと思う。
読解力の向上	・自ら課題を設定し、問題解決に必要な情報を様々な方法で収集・選択・比較・分類して自分の考えを表現し深めていくことができる	B	—	78%（昨年度比1ポイント減）の児童生徒が、アンケートでいろいろな学習をして自分の考えをまとめ発表できたと回答。メディアセンターを効果的に活用していると回答した教員の割合が93%（4ポイント増）であり、一定の取組が進められている。	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 7名…○	
	・RSTを6年生で実施し、結果に基づき授業改善に取り組んでいる	B	83%	RSTについては、県教委の研究協力校として研究を進めており、教員の回答も昨年度から9ポイント上昇している。結果をどう指導に生かすかを今後も研修しながら、児童生徒の読解力の向上につなげたい。		
メディアセンターを活用した探究学習	・ICTや図書などの様々な資料を組み合わせ、自ら課題を見つけ解決する学習を進めることができる	B	78%	メディアセンターやタブレットを使って自分にあった学習ができたという児童生徒が80%（昨年度比4ポイント減）。教員では、ICTや図書資料を組み合わせ問題解決学習を進めていると回答した割合が78%（9ポイント減）であり、課題が見られる。	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 7名…○	・探究に際し、日頃からメディアセンターやクロームブックを上手く活用し工夫して調べていると感じる。 ・児童生徒が自ら課題を探究していくことができる環境づくりを望む。
	・タブレットを家庭学習で活用させている	A	85%	今後、児童生徒が自ら課題をもって探究、課題解決する学習過程をさらに工夫し、メディアセンターやクロームブックの効果的な活用を一層図る必要がある。		
デジタル教科書の活用	・教師用デジタル教科書を活用した授業を実施している	A	93%	教師用デジタル教科書については、学年、教科を問わずほとんどの授業で活用している。児童生徒用デジタル教科書については、教員の肯定的回答が昨年度から11ポイントの減であり、学年や単元、内容によって活用が難しいことが窺える。	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 7名…○	デジタル教科書の活用は今後も続く課題だと思う。内容の改善と教員の努力がより必要。
	・児童・生徒用デジタル教科書を活用した授業を実施している（英語、算数・数学）	B	42%	児童生徒用デジタル教科書の活用の在り方について、これまでの成果も踏まえて指導の工夫や計画の見直しを図る必要がある。		

個別指導の充実	・定期的に授業の振り返りを行い、個に応じた指導を実施している	B	93%	<p>教員の肯定的回答は、個に応じた指導が昨年度より8ポイント増、発展的な学習が4ポイント減。第5、6学年の専科授業で学級担任とのT・Tを適宜実施し、個に応じた指導や発展的な学習の充実に努めている。</p> <p>今後も、各学年や教科単位で指導を振り返る機会を設定したり、授業研究を実施して効果的な指導の在り方を探ったりするなど、一層の授業改善を進めていきたい。</p>	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 7名…○	
	・各教科等において発展的な学習を実施している	B	89%			
異学年交流で心の教育	・異学年による合同授業を実施している	A	94%	<p>教員アンケートでは、上学年が下学年のお手本となるような取組を実施していると回答した割合は97%（昨年度比1ポイント減）、委員会や児童生徒会の活性化に向け取り組んでいると回答した割合は95%（1ポイント減）。</p> <p>一方、児童生徒アンケートでは、他学年の人と一緒に活動することが楽しいと回答した割合が83%（2ポイント減）、交流清掃で協力して活動していると回答した割合が91%（1ポイント増）。また、保護者アンケートでは、行事等で異学年との交流が活発に行われていると回答した割合は83%（5ポイント増）。全体的に概ね昨年同様の結果であり、異学年交流の充実に努めてきた成果が見られる。</p> <p>太子学舎では異学年での集会活動、畠田学舎では異学年で行う清掃、5学年で活動する体育大会や文化発表会など、異学年で活動する機会の充実に努めた。</p> <p>それぞれの学舎との交流を楽しみにしていると肯定的に回答した児童生徒が83%（1ポイント増）であり、学舎を超えて交流する機会もさらに充実させたい。異学年による合同給食については、来年度以降に実施を検討したい。</p>	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 7名…○	<p>・異学年交流は大変良い成果が見られる。先生方のいろいろな考えが、活動を通して児童に伝わり、充実した異学年交流につながっていることを強く感じる。</p>
	・異学年による合同給食を実施している	C	—			
	・たて割りの活動を実施している	B	—			
	・児童生徒会による活動を実施している	A	—			
豊かな人間性と社会性の育成	・地域の方々やボランティアの方々とは交流している（会食、昔の遊び交流会等）	B	78%	<p>保護者アンケートでは、学校が家庭や地域と連携しながら教育を進めていると回答した割合は92%（昨年度比6ポイント増）。一方、教員の肯定的回答は昨年度より6ポイント減と、意識のズレが窺えるものの概ね目標は達成できている。</p> <p>太子学舎での読み聞かせボランティア、昔遊びや王南プラザ、かまどベンチ作り、畠田学舎での町の史跡等見学、家庭科の指導ボランティアなど、地域の方々との交流の機会を多く設定しており、今後も、さらに機会や内容の充実を図りたい。</p>	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 7名…○	
5年生からの部活動	・5年生から部活動を実施している	A	94%	<p>部活動体験を畠田学舎の全教員の協力の下で実施。</p> <p>今後、後期課程の部活動の在り方を見直す必要がある。町教委と連携し、部活動の社会教育への移行を進めるなど、後期課程教員の日常的な超過勤務の解消が喫緊の課題。前期課程教員の部活動指導への参画など、全教員が義務教育学校教員として協力的に指導を進める体制づくりを、超過勤務と並行して模索したい。</p>	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 7名…○	

全教職員が つながる指 導	4-3-2制の取組	・4-3-2制の学年区切りを生かした取組を展開している	B	73%	分離型であるメリットとして、第4学年児童がリーダーとして様々な学校行事に企画する取組を計画、実行。第9学年松の卒業式に加え、第4学年末に旅立ちの式、第7学年末に立志式を実施。今後、第7学年がリーダーシップを発揮できる取組をどう計画・実施するかが課題。	○ 学校関係者評 価委員 7名のうち 7名…○	
	9年間の系統的なカリキュラムの作成・実施	・各教科等で作成した9年間のカリキュラムに基づき授業を進めることができている	B	87%	今年度も引き続き、後期課程教員が第6学年の算数科を指導している。その成果を生かし、9年間を見通した効果的な指導や指導計画の在り方を明らかにしていきたい。	○ 学校関係者評 価委員 7名のうち 7名…○	
	相互乗り入れ授業による学力の向上	・校種それぞれが互いに交流し合い良さを生かした指導ができている	B	76%	教員の肯定的回答は昨年度より17ポイントの増。今年度は、前期課程の国語の研究授業を後期課程教員が参観、また、後期課程の音楽の研究授業を前期課程教員が参観、研究協議を行った。今後も、校種間で指導の特長を学び合うなど、義務教育学校全体で指導力の向上を図るよう努めたい。	○ 学校関係者評 価委員 7名のうち 7名…○	・時間と手間のかかることだと思 うが、今後の成果に必ずつながると思 われる。
		・一部教科担任制を実施し、アンケートで肯定的な回答が85%以上である	B	好きと回答 した割合 算数 53% 理科 75% 外国語80%			
	生徒指導の充実	・9年間を見通した指導計画を立案し、学習規律等について共通した指導体制を確立している	B	82%	児童生徒アンケートでは、学校のきまりや社会のルールを守って生活していると回答した割合が93%（昨年度比8ポイント増）、保護者アンケートでは、子どもたちが学校のきまりや社会のルールを守って生活していると回答した割合は93%（3ポイント減）。生徒指導の取組の一定の成果が、保護者の理解にもつながっている。今後継続して取り組むべき様々な課題があり、学校全体で情報共有しながら一体的に取組を進める必要がある。教育委員会との連携をしっかりと図り、生徒指導の充実に努めたい。	○ 学校関係者評 価委員 7名のうち 7名…○	・情報共有し一体的に取り組むこと が重要。
		・子どもたちの情報を共有し、全体で一貫した指導を行うことができている	A	93%			
	教育相談の充実	・子どもたちに対する心のアンケートを年間計画に位置付け実施している	A	—	児童生徒アンケートでは、自分の悩みや話を聞いてくれる友達や先生がいると回答した割合が91%（昨年度比1ポイント増）、保護者アンケートでは、先生と児童・生徒の間に信頼関係があり、悩みや相談に丁寧に対応していると回答した割合は82%（昨年度と同じ）。教育相談に関わる取組が一定の成果をあげ、保護者の理解にもつながっていると考える。	○ 学校関係者評 価委員 7名のうち 7名…○	

	教育相談の充実	・教育相談の機会を計画的に実施し、課題のある子どもの対応をSC、SSW等と連携し対応している	A	98%	今年度も、県教委派遣のSCにお願いして町費でも勤務いただき、両学舎共に月1、2回程度の教育相談を実施。昨年度並みの相談体制を維持できたが、不登校をはじめ対応が必要なケースが増加傾向にある。 次年度以降も同様の教育相談体制を維持するとともに、さらに充実を図るよう教育委員会とも一層連携していきたい。	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 7名…○	
	特別支援教育の充実	・通級による指導を拡充し、自立活動を中心とした教育を進めている	B	98%	教員の肯定的回答は、通級指導に関しては昨年度より8ポイントの増、個別の指導計画等については7ポイントの減。このことから通級指導の効果は見られるものの、各学級での指導に担当が悩んでいることが窺える。 今後もさらに通級指導のニーズが増えることが予想され、通級指導前だけでなく、指導後の学級担任との連携も重視して進めたい。また、保護者との面談も含め分離型の学舎に対応した指導体制を、教育委員会と連携して充実させる必要がある。	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 5名…○ 2名…△	・今後ニーズが増えることが予想される。より体制を整える必要があると感じる。 ・通級指導を受けている児童の学級担任の負担の大きさが心配。
		・個別の支援計画・指導計画を教職員で共有し、それに基づいた教育を進めている	B	77%			
地域とともにある学校	地域人材の活用	・地域ボランティアやPTA等と連携した授業を実施している	B	76%	保護者アンケートで、学校が家庭や地域と連携しながら教育を進めていると肯定的に回答した割合は92%（昨年度比6ポイント増）。対して教員の回答は、地域と連携した授業について昨年度より3ポイント減、外部講師による学習に関して8ポイント減。学年によって外部人材の活用にはばらつきがあり、教員の回答に反映していることが窺える。 前期課程に比べ、後期課程で活用が少ない傾向があるが、今年度には第8学年の家庭科で和服の着付けに地域の外部講師に指導いただいたほか、例年部活動指導員として地域の方に協力いただいている。 今後もさらに外部人材の活用、連携に努めたい。	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 7名…○	
		・外部人材を講師とする学習を実施している	B	79%			
		「あいさつ+1」運動の推進	・委員会活動等で計画的にあいさつ運動を行っている	B	81%	児童生徒アンケートで、自分から挨拶をするように心がけていると肯定的に回答した割合が89%（昨年度と同じ）、保護者アンケートで、子どもたちはよく挨拶をしていると肯定的に回答した割合は79%（5ポイント減）。教員の肯定的回答も3ポイントの減であり、取組を今後一層推進していきたい。 畠田学舎では、児童生徒会が中心となってあいさつ運動を実施している。今後も管理職が率先して児童生徒を出迎えることをはじめ、取組を継続したい。	○ 学校関係者評価委員 7名のうち 6名…○ 1名…△

※デジタル教科書補足：「英語」は5年生以上、「算数・数学」は南義務教育学校のみ

妥当性

- ・自己評価は妥当である……○
- ・自己評価は妥当とはいえない……△

